学位（博士）論文　要旨

フィリピンにおける身体技法の実践と言説に関する文化人類学的研究

―武術「アーニス」を事例として―

大 久 保　　豊

広島大学大学院総合科学研究科

An anthropological study on practice and discourse of body technique in the Philippines

- in the case of martial arts “ARNIS”

Yutaka OKUBO

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Ⅰ　本研究の目的

本稿は、フィリピンの身体技法「アーニス」を実践する人びとによる､この身体技法の歴史や｢マスター」と呼ばれる指導者的立場にある実践者に対する評価を通じて、1.身体技法の実践という具体的状況において表出する力の観念のありようを捉え、かつ2.そうした観念が実践に携わる人びとの関係にどのような影響を与えるのかについて検討し、フィリピンの文化人類学的研究における力の観念についての議論に新たな知見を提供することを目的としている。

Ⅰ-1　力(power)の所在を巡る先行的議論

フィリピン研究における力の観念を巡る議論は、政治的権力観、あるいは階層分化的な社会構造に対する関心と密接な形で展開してきた。1970年代以降に展開してきたランデの「パトロン―クライアント」論に代表される古典的議論からは、農民が力のある地主の庇護に対して持つ恩義の意識を強調することで、地主の支配力を観念的な側面から説明しようとする傾向が指摘できる。こうした恩義の意識によって前景化する力の観念は、これまでフィリピンの政治思想研究も含んだ、幅広い分野で応用されてきた［LANDE 1965, LYNCH 1959、関 2003: 106など］。他方でこうした議論に対して、異階層間の静的で固定的な階層社会像を強化しているという問題点が指摘され、そこから階層間の対立・抗争に着目した「日常型抵抗論」［SCOTT 1985］、さらに被支配階級の主体意識は、支配階級の力に対する抵抗と、その力を獲得しようとする相矛盾したベクトルの中で構築されるといった議論が［PINCHES 1992］提起されるに至った。例えば関はこれらの議論を踏まえて、支配と被支配の関係の概念的な拠り所としてその当事者が語る、あるいは外部の人びとが想定する力の観念を、日常的な人びとの交渉、相互関係の過程から後追い的に構築される概念として

捉える必要性を指摘した［関 2003: 115、2007］。

Ⅰ-2　本稿の考察の枠組み

こうした先行的な知見を踏まえて、本稿では、特に関の指摘した関係性と密接に結び付いた力の観念についての議論を参照し、アーニスという具体的な身体技法の実践状況における力の観念の表出の仕方と、そうした観念が集団形成に果たす役割を検討した。

なお本稿では、身体技法の実践を目的として結集する集団を題材として扱うため、実践と集団形成との関係をどのように規定するかを重要な論点と捉えた。この問題において本稿が参照とした知見は、レイヴとウェンガーが提起した、「正統的周辺参加」の議論である。この議論において彼らは、知識の蓄積の度合いに応じて、集団の構成員が中心から周辺部へと同心円状に位置づけられる構造を想定し、周辺部の参加者が様々な経路を辿って知識を蓄積していくことを、こうした実践型集団の特質であると指摘した。本稿が扱うアーニスの実践グループもまた、指導と学習という形で知識の伝達を行うことを目的とすると共に、組織における役割の重みに応じて、参加者個々人が中心から周辺へと同心円状に配置される集団と位置づけることができるとすれば、集団の中心部にいる者、すなわち「マスター」と呼ばれる人びとが中心部に位置するに至る理路と根拠を解き明かすことが重要となってくる。本稿では、アーニスが武術的な要素を含んだ身体技法である以上、マスターに対する評価の尺度として力の卓越性が重要な意味を持つことになると想定し、各章での議論では、その力の所在を具体的に解明することを共通の課題とした。

Ⅰ-3　アーニスの特徴

アーニス（arnis）とは、バストン（baston）と呼ばれる籐（ラタン）製の棒状の道具を用いる身体技法を指す名称で、攻撃や防御と言った武術的な動作を特徴としている。実践の形態は多様だが、集団的な実践の場合、指導者の役割を担う人物をマスター（master）と呼び、そうしたマスターを中心として集団が形成されるといった構造については概ね共通している。本稿では様々な実践グループの中でも、マニラ首都圏、そしてセブ市を拠点とする複数のグループを主要な考察の対象として取り上げた。

Ⅱ　各章の考察

以下では、章ごとに検討内容の概略とその結論を述べる。

二章ではまず、調査時点（2009年）で展開していたフィリピンにおけるアーニスの実践の具体的な状況を筆者の経験に基づいて描写した。それぞれの実践の主体の組織的技法的な形態は極めて多様であるが、本稿では実践の形態に応じて、「武術」、「スポーツ」、「伝統文化」の三つの部類に大別した。また「武術」の部類に整理したグループを、「段位制（ランキング・システム）」といった制度化の度合いに応じて、制度化の高いグループを「武術a」、制度化の度合いが「武術a」と比較して相対的に低いグループを「武術b」という二つの下位部類に整理した。

三章では、前半部で伝統文化としてのアーニスの歴史的価値に関する言説の分析を行い、後半部において具体的な実践グループの展開過程について検討した。前者については、フィリピン南部のイスラム圏を発祥とする戦闘技術、ならびに支配者の目から秘匿された民衆の抵抗手段、といった要素が、歴史的存在としてのアーニスの表象において中核的な要素となっていることを示した。一方アーニスの実際の展開過程については、主にマニラ首都圏やセブ市において、1930年代以降に集団的な実践が顕著となっていったことを示した。1970年代以降の「モダン・アーニス」という形式の興隆が示すように、近年のアーニスの展開は、フィリピンの地域的な枠組み内で限定的に生じた現象であるというよりも、外来文化としての武道の流入と定着が誘因となって引き起こされた社会現象の一つとして捉える視座が導き出された。

こうした歴史的経過を踏まえて、四章では、現在のアーニスの実践グループがどのような秩序、構造に基づいて活動を展開しているのかについて、特にマスターの称号を得るまでの過程に注目

して分析を行った。ここでは特に、身体的な能力の卓越性といった身体能力的な意味でも、熟練者が纏う権威という観念的な意味でも、「力」が評価の尺度として大きな意味を持つと考えられる、「武術」の部類に絞りこんで検討した。

まず「武術a」の具体例として前述の「モダン・アーニス」など幾つかのグループを挙げた。こうしたグループにおいては、マスターへの上昇は「ランキング・システム」によって明確に制度化され、マスターという存在もまた、この構造の頂点を指し示す称号としての意味合いが強いことが示された。そして「武術b」においては、先代のマスターとの直接的な交流が、現在の実践者の立場や位置付けを大きく規定していることを示し、この二つの下位部類の相違点を明確化した。このように四章の議論は、特に「武術b」の実践において、マスターと呼ばれる人びとの存在が重要な意味を帯びている状況を明らかにするものだった。その上で五章では、マスターの権限や、それを裏付ける力の観念の根拠に焦点を絞って検討した。とりわけ「武術b」では、実践上のマスターと弟子という関係を重要視し、実践者は自身の身体能力や業績の誇示を差し控える傾向があることを示した。同時に、複数の事例を通じて、正統な後継者としての立場を巡ってしばしば集団内部で対立的な状況が生じ、組織的には分散する場合があるが、そのような場合でも先代の元生徒同士である実践者は、互いに先代マスターとの紐帯意識を持ち続ける場合が多いという特徴を明らかにした。そのため、マスターから引き継いだ力という観点では、こうした分派状況は散逸というよりも拡散と表現する方がふさわしいとする見解を示した。

こうした議論を踏まえて、六章ではマスターの力という視点を導入することで、二章で示した三つの部類の相互関係がどのような姿をとって現れるのかを検討した。その結果、「武術」としてのアーニスを実践する人びとは、「スポーツ」としてのアーニスが普及するにつれて失いつつある、伝統的に引き継がれてきた武術的知識の価値を強調し、その実践を「スポーツ」としてのアーニスとの差異化に用いてきたことを示した。その上で、「武術」におけるマスターが、伝統的な武術的知識の継承者としての意味も帯びるようになった過程を示した。これらは主に「武術b」の事例に基づいた分析であるが、「武術a」においても、「ランキング・システム」がマスターの力をより強化する側面を持つなど、マスターの力と権威が大きな意味を持っていることが示された。

結論となる七章では、上記の議論を総括した上で、今後の課題について検討した。本稿が例証した力の観念は、例えばウォルターズやアンダーソンが想定したような、個々人が保持する霊的資質としての力という観点とは異なり、実践者間での継承の認識と深く結び付いていることを示した。同時にまた、ランデが垂直二者間関係に基づいた支配を根拠付けるために用いた力の観念、あるいはピンチェスが示したような、下層の人びとの団結を促す観念としての力の観念とは異なり、社会的には中間的な位置づけにある人びとによる力の生成と獲得の動きとして捉えうるという視座を提示した。さらにアーニスの実践グループにおける技法的な知識の指導と学習の構造をレイヴとウェンガーの「実践コミュニティ」における「正統的周辺参加」の議論に照らし合わせ、「知識の継承者」としての信憑が、実践グループ内の位置づけに大きな影響を与えているという点に、本稿の議論の特徴を見出すことができるとした。「継承」の視点の導入は、とりわけ本稿が対象としたアーニスに見られるような、言語化し得ない身体的な知識を含む実践によって人びとが結合していく「実践コミュニティ」を分析の対象とする際に、重要な要素となり得るという可能性を提示した。